談話室

気血筋骨などを意味する六腑 についての検討

Studies on Liu Fu meaning Muscles, Bones and the like

遠藤 次郎¹⁾ 中村 輝子²⁾

Jiro Endo¹⁾ Teruko NAKAMURA²⁾

要旨 六腑は消化器器官をさすと一般には考えられている。本稿では、古典の中に気血筋骨などの形体を意味する六腑の見方が存在することを示し、この六腑は九竅を介して五臓の精気と外界の天地の精気を交流させる機能を有していることを明らかにした。

漢方医学において六腑といえば、一般には胃、大腸、小腸、胆、三焦、膀胱をさす¹⁾。ところが古典の中には六腑を消化器系器官とは解釈できない例が少なからずみられ、当惑させられる。これらの六腑は気血筋骨などの体組織をさし、その背景には独得の生理観が存在していると察せられる。

本報では、気血筋骨などを意味する六腑の例を漢方の古典の中から拾い上げ、このような見方があることを明らかにし、さらに、六腑と五臓や九竅との機能的な関係など、背景にある独得な生理観を考察し、その意義を究明した。

1. 『千金方』「筋極」, 「補腎」に見られる例

i) 五臓邪傷則六腑生極, 故曰五臓六極也

(「筋極」)

ii) 五勞, 五藏病。六極, 六腑病。七傷, 表裏受病

(「補腎」)

i) と ii) において六極は六腑の病であるとしている。多少の違いはあるものの、どの文献でも六極は気極, 血極, 筋極, 骨極, 肉極, 精極をさしており、胃腸などの病をあげる例はない。した

がって、ここにおける六腑は、気, 血, 筋, 骨, 肉, 精の6つの形体²⁾と考えるのが適切である。六腑を形体と受けとると、ii) の文章全体が理解しやすくなる。すなわち、五勞は五臓を中心とした裏の病、六極は形体を中心とした表の病、そして七傷は表と裏の両方にわたる病と解されるからである。

2. 『靈樞』「終始」に見られる例

①陰者主藏, 陽者主府。②陽受氣於四末, 陰受氣於五藏。……③五藏為陰, 六府為陽。

①, ②, ③を相互に考え合わせると、ここにおける六腑は四末(四肢)を構成する気血筋骨などの形体を意味する。この篇は人迎脈口診を述べたもので、体外(形体)の病と体内(内臓)の病を人迎(陽脈)と脈口(陰脈)によって把握しようとしている。

3. 『素問』「太陰陽明論」に見られる例

①陽者天氣也, 主外。陰者地氣也, 主内。……②故犯賊風虛邪者陽受之。食飲不節起居不時者陰受之。③陽受之則入六府。陰受之則入五藏。④入六府則身熱不時臥, 上為喘呼。入五藏則臍滿閉

1) 薬, 針, 2) 薬, 1) 2) 東京理科大学薬学部, 東京

1) Pharmacist/C. A., 2) Pharmacist, 1) 2) Faculty of Pharmaceutical Sciences, Science University of Tokyo, Tokyo

塞, 下為殄泄, 久為腸澼。

①～④の記述を相互に考え合わせると, ここにおける六腑は風邪などを受けて身熱を呈するような体の部位でなければならない。したがって, これを気血筋骨などの形体とするのが妥当である。

4. 『諸病源候論』「任娠候」に見られる例⁹⁾ (1)

任娠九月始受石精。以成皮毛。六府百節莫不畢備。

はじめに, この篇全体の主旨について触れたい。ここでは, 受胎から出産までの妊娠の経過を月ごとに論じ, 妊娠1カ月から5カ月の間に五臓が作られ, 4カ月から9カ月の6カ月間に六腑が作られるとしている。4～9カ月(引用文は9カ月目)の間に, 血脈, 氣, 筋, 骨, 膚革, 皮毛の六つが順次できると述べているので, この項のはじめに引用した六腑はこれらの6つの形体を意味することになる⁴⁾。

文献学的にも, 内容の面からも, 『諸病源候論』より古い妊娠の記述が『管子』「水地」篇にみられる。両書を比較検討すると, 六腑の特有の生理観が浮かびあがってくる。ここで, その内容を明らかにしたい。

「水地」篇でも, 妊娠した初期に五臓ができ, 次に形体(五肉⁹⁾: 隔, 骨, 腦, 革, 肉)ができるとしている。また, 続いて, 鼻, 目, 耳などの九竅ができ, 生誕し, 体内の五臓の精氣と外界の天地の精氣とが九竅を介して交流し合い, その結果, 各々の器官が機能を発揮するようになり, 目が見えたり, 耳が聞こえたりするとしている。このことを念頭において六腑を見直すと, 六腑は五臓と九竅の間に位置し, 五臓の精氣と九竅から入った天地の精氣とを交流させ, 自らの活動のエネルギー源とする, といえる。

馬王堆出土の『陰陽脈死候』にみられる記述(氣, 血, 筋, 肉, 骨の各々を汗空, 目, 舌, 唇, 齒によって診察している)⁹⁾や『呂覽』「達鬱」の「九竅五藏六府」といった記述, 『莊子』「齊物論」の「九竅六藏, 賅而存之」といった記述なども参考にすると, 古くから, 五臓, 六腑, 九竅の三者を関連づけた生理観があったと推察できる。

5. 『靈樞』「大惑論」に見られる例

五藏六府之精氣, 皆上注於目, 而為之精。①精之窠為眼, ②骨之精為瞳子, ③筋之精為黑眼, ④血之精為絡, ⑤其窠氣之精為白眼, ⑥肌肉之精為約束裹攣。

①～⑥にみられる精, 骨, 筋, 血, 氣, 肌肉は本稿の最初の例に述べた氣, 血, 筋, 骨, 肉, 精と同じである。したがって, ここにおける六腑も形体とするのが妥当である。また, 全体の内容から, 五臓と六腑と九竅(この場合は目)を関連させた生理観が基盤となっていることも理解できる。

6. 馬王堆出土『十問』に見られる例⁹⁾

i) 善治氣者, 使宿氣夜散, 新氣朝最, 以徹九徹(竅)而実六府。

ii) 夜半之息也, ……六府皆発, 以長為極。

この篇の主旨は呼吸法により天地の精氣を形体に充満させるというものである。したがって, iとiiにおける六腑も形体と受け取るのが妥当である。また, 「徹九竅」, 「発」という字句とともに使われていることから, 九竅(この場合は腠理も含む)を開いて形体の氣と天地の精氣を交流させるという生理観にのっとっていることも理解できる。

7. 『太素』「氣穴」に見られる例

勇而勞甚則腎汗出。汗出逢風, 内不得入其藏而外不得越於皮膚。客於六府, 行於皮膚, 伝為附腫。本之於腎。名曰風水。

ここにみられる六腑も五臓(腎)と九竅(汗空)とをつなぐ形体の意味である。なお, 六腑の意義の史的変遷を考える上で注目されるのは, この引用文中の六府が, 『素問』「水熱穴論」では「玄府」と書き換えられており, さらに「所謂玄府者汗空也」の文章が附されている点である。時代が下って, 六腑が消化管の意味にしか解されなくなったために, 六府を玄府と書き改めたものと推察される⁹⁾。ただし, 六腑は九竅に直接通じているので, 玄府(=汗空)と直しても意味は通じる。

8. 『靈樞』「九針十二原」に見られる例

i) 五藏有六府。六府有十二原。十二原出於四関。四関主治五藏。五藏有疾, 当取之十二

原

ii) 凡此十二原者主治五藏六府之有疾者也

六腑に十二原穴があるといいながら、本篇には五臓に対応する十二原穴しか記されていない。したがって、ここにおける六腑は五臓と十二原穴を連繫する形体とするのが妥当である。

本篇では十二原穴と四関（四肢の関節）の機能を同一視しており、ツボや関節が天地の精気を六腑に導入する作用のあることを述べている⁹⁾。したがって、ここでは五臓、六腑、九竅を関連させた一般的な見方を、経絡説にのっとって、五臓、六腑、ツボ、または五臓、六腑、関節が相互に交流するものとしてとらえ直していることがわかる¹⁰⁾。

9. 『諸病源候論』「妊娠候」に見られる例(2)

妊娠十月。五藏俱備，六府齊通。納天地氣於丹田。故使關節人神威備。

妊娠9カ月までに五臓と六腑（形体）が備わるという『諸病源候論』の説についてはすでに触れた。これに続いて、この引用文では、妊娠10カ月目で五臓六腑が活動しはじめることを述べている。

『管子』「水地」篇の妊娠の記述が五臓、六腑、九竅を関連させた基本的な説をとっていることを本稿ですでに述べた。これに対して、この引用文では、「天地の気を丹田に納める」、「関節人身」、「六府百節」¹¹⁾などの表現から、六腑はツボや関節を介して外界と流通していることがわかり、経絡説の影響を読み取れる。

10. 『靈枢』「経脈」に見られる例

i) 凡刺之理，経脈為始。營其所行，制其度量，内次五藏，外別六府，願盡聞其道。黄帝曰，人始生先成精，精成而①腦髓生。②骨為幹，③脈為營，④筋為剛，⑤肉為墻，⑥皮膚堅而⑦毛髮長。穀入于胃，脉道以通，血氣乃行。

ii) ……⑧大腸手陽明之脈……是主津……，⑨胃足陽明之脈……是主血……，⑩小腸手太陽之脈……是主液……，⑪膀胱足太陽之脈……是主筋……，⑫三焦手少陽之脈……是主氣……，⑬胆足少陽之脈……是主骨……。

i) は十二経脈の総論に当り，ii) はその各論に当る。i) の引用文では，胃の消化により得られた十二経脈中の血気が体内の五臓と体外の六腑を規則的に循環することを述べている。五臓は引用文中の①に¹²⁾，六腑は②～⑦に相当するので，ここにおける六腑は骨，脈，筋，肉，皮膚，毛髮の6つの形体を指すことがわかる。一方，十二経脈の各論（引用文のii）では，6つの陽経が気，血，筋，骨，津，液の各々をつかさどると述べている¹³⁾。すなわち，十二経脈のうちの六陰経が六臓（肝，心，脾，肺，腎，心包）をつかさどるのに対し，六陽経は気，血，筋，骨，津，液の六腑をつかさどるとしている。

引用文のiiでは，六陽経に対して，胃，大腸，小腸，膀胱，胆，三焦を配当している。これに基づき，今日では，六陽経，六腑，消化管とのつながりのみが強調される。しかしながら，引用文，i) の内容も考え合わせるならば，六陽経のつかさどる六腑は六つの形体でなければならない¹⁴⁾。ここに引用した「経脈」篇には，六腑のもつ意味合いが形体から消化管へと変遷したことの一端が伺える。

ここでさらに1つ注目したいのは，五臓の精気と形体の精気とを交流させるエネルギー源を胃の消化としている点である。口は九竅の1つであり，口から入る水穀は天地の精気である。したがって，胃の消化作用は外界の精気を導入する九竅の作用の1つとも受け取れる¹⁵⁾。このように考えれば，九竅と六腑と五臓を関連させる説と，胃の消化と六腑と五臓を関連させた説とが類似した意義をもつことを理解できる。

結果および考察

六腑についての本稿での議論を整理すると，次のようである。

1) 漢方の古典には，消化管などを意味する六腑以外に，気血筋骨肉精といった形体を意味する六腑が存在する。

2) 気血筋骨などを意味する六腑は九竅を介して五臓の精気と外界の天地の精気とを交流させる。また，これらの精気は六腑の活動

エネルギー源となる。

- 3) 五臓と六腑と九竅の精気が相互に交流するという見方は古い文献中に多く、基本的な見方と考えられる。この他、五臓と六腑と関節、または五臓と六腑と経穴の各々の精気が相互に交流するという経絡思想に基づいた見方もみられる。
- 4) 胃の消化作用で得られたエネルギーが五臓と形体の精気を交流させるという見方もある。これは九竅(口)が天地の精気(水穀)を導入するという見方の変形と考えられる。

形体を意味する六腑は、消化管などを意味する六腑に比べて、古典での使用頻度は少なく、一部の流派の医学思想であったと推定される。この流派の生理観の特徴は、九竅などを介して、天地の精気と五臓の精気を交流させようとしている点にある。この見方は古い文献中にはしばしば見出され、その源泉は、呼吸法などによって、天地の精気と体内の精気を交流させようとする導引の思想に基づいている。したがって、本稿で扱った六腑の見方も導引の思想に由来するといえよう。本稿の6番目の例で示した『養生方』が導引の系統の書物であることもこれを裏付ける。

一方、消化管を中心とした六腑の機能を古典の中から調べてみると、六腑は胃の消化によって得られたエネルギーを受け取り、六腑の各々が所属する五臓の精気を形体に運搬する役割を荷っていることがわかる¹⁰⁾。

六腑についての2つの見方を比べると、呼吸法などで直接に天地の精気を導入する方法よりも、食物を介して天地のエネルギーを導入する方法のほうが、明らかに医学の本流となり得る。そのため、六腑を形体とする見方は徐々に影をひそめ、現在ではほとんど理解されなくなったと思われる。しかし、呼吸法を中心とする導引の思想は経絡説の源泉とみなされる思想であり、これを無視することはできない。導引の思想は色々な所で医学の本流に流れ込み、大きな影響を与えている。本稿で扱った六腑もその一端を示すものといえよう。

なお、六腑として上げる6つの形体(気、血、筋、骨、肉、精など)は文献により異なっている。各々の形体の意義と問題点については、本稿の論点とはずれることから別報で考察した¹⁷⁾。

文献および注

- 1) 『素問』『金匱真言論』など。この他、咽喉、胃、大腸、小腸、胆、膀胱の6つ(『太平御覧』人事部、形体)や、上焦、中焦、下焦、大腸、小腸、膀胱の6つを指す例(『小学紺珠』人倫類)も稀にみられる。ただし、消化管を中心とした6つの臓器を指すという点で、これらの説は共通している。
- 2) 気、血、筋、骨、肉、精の6つを統括する用語が古典の中には明記されていない。「形」、「形蔵」、「身形」、「身体」、「体」などと表現されることもあるが、十全ではない。「形」には「流形」の意味があり、それが堅固となって「体」となるという「形体」の見方が古典にある(「(流)形成(体)」(馬王堆出土『十問』)、「其動無形、其静無体」(『淮南子』精神訓))。6つの要素のうち、気、血、精は「形」に、筋、骨、肉は「体」に相当するところから、本稿では6つの要素を総括する用語として「形体」を用いた。
- 3) 『千金方』『徐之才逐月養胎方』に同じ記述がある。馬王堆出土『胎產書』にこの祖型とみられる記述がある。ただし、本稿で扱った部分は欠損していて読めない。
- 4) 水火金木土石の六行が配当されていることからわかる。
- 5) 五肉を五内の誤りとする説もある。
- 6) 江陵張家山出土『脈書』にも同様の記述がある。本稿での配当は『脈書』に従った。
- 7) 『馬王堆漢墓帛書』[肆]、馬王堆漢墓帛書整理小組編、p.147、1985
- 8) 六と玄は字が似ていることからくる伝写の誤りとも解される。しかし、「蔵」を「蔵府」に、「皮膚」を「皮裏」に直していることから、単なる伝写の誤りとは考えにくい。時代が下ってから、汗空としての玄府に積極的な意味をもたせようとしたものであろう。
- 9) 遠藤次郎：日本東洋医学雑誌、37巻1号、p.19、1986
- 10) 四関という用語を用いながら、耳目などの九竅を意味する例が『淮南子』『本經訓』にみられる(「四関(耳目心口)則身無患、百節莫苑」)。また、『説苑』に「炊灼九竅而定経絡」(扁鵲の治療)と

ある。ツボと九竅との差異は少ない。

- 11) 本稿の例4を参照。
- 12) 馬王堆出土『胎産書』では、五臓を「流形、膏、脂、血、氣」の藏精に配当している。
- 13) 氣、血、筋、骨、津、液は氣、血、筋、骨、肉、精の変形であり、毛髮、皮膚、脈、肉、筋、骨の原型と考えられる。詳細は次報「六極の検討」参照。
- 14) 遠藤次郎：日本東洋医学雑誌，39巻1号，p.9，17，1988
- 15) 馬王堆出土『十問』や『却穀食氣』に，呼吸法で天地の精氣を導入するのに際して「食氣」という表現を使っている。
- 16) 「六府者，所以受水穀而行化物者也。其氣内入于五藏而外絡支節」(『靈樞』『衛氣』)
- 17) 「六極の検討」(遠藤次郎，中村輝子，東洋医学会誌，42巻4号，p.25，1992)

(1991年9月17日受付)